

不倫人妻調教物語

杉原京子編(1)



不倫人妻調教物語



杉原京子編(1)



プロローグ (ショートバージョン)

杉原京子(すぎはらきょうこ)は、36歳の専業主婦。
夫の英輔(えいすけ)は60歳で、大学教授。二回り年の差のある夫婦だった。
結婚して6年、子供はいなかった。

京子と英輔は、夜の営みに問題を抱えていた。
英輔は高齢になり、性力は減衰、デスクワークが多く、太り、体力も衰えていた。
30代でまだまだ性欲旺盛の京子は悶々とした日々を過ごしていた。

速水良樹(はやみよしき)は京子が通うジムのインストラクター。
京子はデパートで速水に声をかけられる。
京子のスポーツウェアの買い物につきあう速水。
買い物後、二人はバーに行く。

バーにて、速水はセフレが何人もいる男であると判明する。
あきれつつも体が熱くなる京子。
当初は速水の誘いを断っていた京子だが、酔いが回ると共に大胆になっていく。
結局、速水の部屋へと向かうことになる……

*次ページからプロローグ・ロングバージョンが始まります。
*ロングバージョンは官能小説風で6ページです。

杉原京子(すぎはらきょうこ)は、36歳の専業主婦だ。
夫の英輔(えいすけ)は60歳で、大学教授。二回り年の差のある夫婦だった。
結婚して6年、子供はいなかった。

「ああ、やはり、だめだ」

英輔はベッドで京子に覆いかぶさりながら言った。

その息は荒く、辛そうな表情だった。

2人は夜の営みに問題を抱えていた。

英輔は、高齢になり、性力は減衰、デスクワークが多く、太り、体力も衰えていた。

充分に勃起せず、普通にセックスすることができなくなっていた。

「無理しないで」京子は汗をかく夫を抱きしめ言った。

大学時代の恩師でもある夫を京子は尊敬していたし、妻として愛していた。

「すまない」と英輔は言う、京子の横にごろりとあおむけになった。

正直、京子は性欲を持て余していた。

現在、30代半ば、性欲の衰えはまだ感じない。

むしろ、大学時代よりも強く感じることもあった。

しかし、不自由なく生活させてもらっている手前、性欲まで満たすように夫に要求することはできなかった。

薬に頼っても良いと英輔は言ったが、心臓に不安を抱える夫に飲ますことは京子としても恐かった。

京子は、体力維持と気分転換を兼ねて、近所のスポーツジムへ通うことにした。

速水良樹(はやみよしき)はジムのインストラクターだった。

定期的にボディビル大会にも出る速水は、180cmを超える長身で引き締まった体、浅黒い肌に白い歯がさわやかな男だった。

まだ、20代半ばだが、社交性も高く、ジムに通うおば様達には、特に人気のスタッフだった。

京子も、当然ながら速水に惹かれた。

器具の使い方をレクチャーされている時に、その張りのある体に触れてみたいという欲求を感じていた。
そんな京子に、速水は紳士的に接してくれた。

「杉原さん」と声をかけられた。

京子が駅前のデパートでスポーツウェアを見ていた時だ。

振り向くと、染み一つない白いシャツに皺のないぱりっとしたチノパン姿の速水がいた。

いつものジャージ姿とは異なっていたが、その飾り気のない中に漂う上品さがとても似合っていた。

相変わらず、爽やかな笑顔だった。

「買い物ですか？」と速水。

「え、ええ、新しいトレーニングウェアを……」と答えながら、京子のもっときちんとした格好をして来れば良かった、と思った。

簡素なサマーワンピースに、安物のサンダル。

唯一、時計だけはそこそこ高級だったが、アクセサリーはつけていなかった。

髪も、簡単に後ろで束ねただけだ。

資産から考えるとそこそこのセレブ妻と言っても良い京子だが、普段の生活スタイルは質素だった。

ジムの外で速水に会えて嬉しいと思ったが、みすばらしい自分の姿に、すぐに逃げ出したい気持ちになった。
しかし……

「私服姿の杉原さんも、魅力的ですね」

速水は普段と変わらない笑顔で言った。

「また、そんな。上手すぎますよ」

京子は、思わず親しい友人に返すように微笑しながら言った。

どういうわけか、速水は、そんな風に気軽に接することができる相手だった。

「いやいや、営業トークではないですって、本当にそう思ったんですよ」

速水は手を顔の前で振って、笑顔で返す。

見た目はいかにもレベルの高いイケメンなのだが、ちょっとお笑い芸人のようなユーモアがあり、対する人はガードが緩くなってしまうのも彼の特徴だった。

「どういふものをお探しですか」

速水がハンガーにかかっている商品を見て言った。

「いえ、特に、何か良いものがあれば、と……」と京子。

「鍛えたいなら、これ系で、ダイエットならこっちですね」と速水は、高機能スポーツウェアを手に取り言った。

「最近、様々な素材のものがでていて、目的にあったものを選んだ方がいいですよ」

速水は、プロのインストラクターらしく説明してくる。

なるほど、と京子はその説明を聞き、商品を手にとった。

速水は、商品を買わせようとする店員かと思うほどに、詳しい商品説明をしてきた。

その話は興味深く面白く、結局、京子は小一時間、速水と買い物をする事になった。

「速水さんのせいで、こんなに買っちゃいましたよ」

支払いを終え、京子は笑いながら言った。

「はは、すいません。でも、使えますよ」

速水は疲れた顔など一切せずに言う。ひたすら話続けていたはずなのだが。

「ありがとうございます」京子は頭を下げた。

「お茶でもしますか？」

頭を上げた京子に速水が言った。当然のごとく、笑顔のままであった。

「えっと……」と躊躇した京子。

その時、スマホからメールの着信音がした。

確認すると、英輔が、急な会議と食事会が入り、帰宅が遅くなるという内容だった。

しばしと言っても、ほんの数秒だが、京子は逡巡し、結局、こう言った。

「あの、速水さんが良ければ……」

・

「乾杯」と速水は言う。ワイングラスを向けてきた。

思わず京子もグラスをあげ、軽くあてた。

お茶というから、スタバやドトールあたりのコーヒーショップをイメージしたのだが、どうせならと言って速水が連れてきたのは、洒落たバーだった。

京子には、久しく来ていないタイプの店だ。

自分の安っぽい恰好に、改めて赤面してしまいそうになる。

しかし、速水はそんなことは気にしていないようだった。

学生時代にバックパッカー一つで海外旅行に行った話や、筋トレの科学的な話、水球部で活躍した話など、興味深く面白い話題を豊富に振ってくる。

京子にとっては、長らく忘れていた、この世界のキラキラとした一面を思い出させてくれるような内容だった。

そんな話を聞きながら、ワインを4杯も飲んだころには、自分の安っぽい服装など気にならなくなっていた。

速水はちょうど10歳年下であることもわかった。

若さからでてくる生命力が、自分とは明らかに違うと思った。

速水は若い、軽くなく、肉体だけでなく頭脳の出来もレベルが高いと感じられた。

自分が26歳であった時も、こんな感じで知的で若いエネルギーを発つことができていたのだろうか？

いつの間にか、日は落ち、店内はほのかな橙色の明かりが灯る状態になっていた。

落ち着いたジャズが流れ、落ち着いた人々が、落ち着いた会話を楽しんでいた。

「あーあ、やんなっちゃうな」

京子は足をプラプラさせながら言った。

「気づいたら、あと少しでアラフォーよ」

「人生早いって本当」

京子は、二回り年上の夫がいることに、不満はなかった。

年齢なんてただの数字で、大事なことは他にある、と思っていた。

けれど、年をとることで失っていくものがあるのが現実である、とも思っていた。

「速水君だって……」

「杉原さんは魅力的ですよ」

京子の声を遮るように速水が言った。笑顔ではなかった。

え？ と京子。

「だめですよ、魅力的なものを魅力的でないとするのは人類にとって罪なんですから」と続ける速水。

しばし、絶句する京子。

「だいたい、30代なんて、まだまだこれからって年齢じゃないですか？」

「叶姉妹ってたしか50代だったと思うし、マドンナなんて60代ですよね」

「80代だって、90代だって、魅力のある人は、魅力のある人ですよ」

速水は真面目な顔をして言った。

「え、ええ、でも、叶姉妹は特別じゃない？」

「私みたいな一般人とは違うわよ」

京子は苦笑いしながら言う。

「負けてないと思いますよ」

速水が京子の目を見て言った。

「内緒ですが、実はジムの仲間だって、杉原さんが来るとテンション上がっているんですから」

速水が顔を近づけ、小声で言う。

「そんなことないでしょ？」と苦笑いを続ける京子。

「そんなことありますよ。だって、そのムッチリした体に、びったりしたウェア着てくるんだから」

「あ、正直に言っただけなんで、セクハラで訴えないでくださいね」

「それと、本当にジムの連中には、僕がこんなこと言っただけで言わないでください」

速水が笑顔でウインクして言う。

正直に言うと、この時、京子は欲情していた。

久しぶりの感覚だった。

男の肉体を強く欲している自分を感じていた。

アルコールが回ってきたのと、店の雰囲気、速水の醸し出す雄々しい性的な魅力に、京子のメスの部分が反応していたのだ。

「旦那さんとは仲が良いんですか？」

速水が聞いてきた。

既婚者というのは言っていないが、結婚指輪をしているので、旦那がいると思ったのだろう。

「ええ、仲が良い方だと思いますよ」

京子は返した。

「何も問題はない夫婦なんですね？」

速水が聞いてくる。

「問題は……」

京子は言葉につまった。

京子は、性的欲求不満があることを、速水に打ち明けたいと思っていた。

そんなことをして、どうなるというわけでもないのだし、もしも、不倫関係なんかになってしまったら、それこそ新しい問題が起こってしまう。

だいたい、速水のような男が自分を相手にするとも思えなかった。

「どんな問題なんですか？」速水がやや真剣な顔で聞いてくる。

「別に、よくある話で……、旦那が高齢だからかちよつと、エッチが普通にはできなくて」

京子は、結局言ってしまった。

半笑いでジョークっぽく言ったつもりではあった。

できるだけ、軽く、笑い話の一つとしてでも聞いてくれれば良かったのだ。

お酒が回ってきていたし、速水はそんなことを聞いても引かれるような相手とも思えなかった。

言うことで、何か肩の荷が下りたような感じがした。

「それはよくありませんね」

速水に笑顔はなかった。

「どのくらい年上なんですか？」

聞かれて、京子は二回り上と教えた。

「なるほど」と速水。

「そういう時、男性なら風俗に行ったりできるとは思うのですが、女性はどうするんですか？」

次いで、聞いてきた。

「どうするって、どうすることもできないわよ」京子は少し緊張しながら言った。

やはり、言うべきではなかったか、と思い始めていた。

不安な心を抑えるように、ワインを飲み込む。

「一人でして、我慢するとかですか？」

速水がつっこんだ質問をしてきた。

ジムの客相手に聞くことではないと思うのだが、京子はエッチな話をしたい自分を感じていた。

体が熱いのは、アルコールのせいだけではないと思った。

「まあ、そうするしかないかなあ」

京子はあいまいに答えた。

10歳も年下に手玉に取られている感じに少し腹がたった。

「速水君は、彼女はいるんでしょ？」

学生じゃないんだから、と思いながらも聞いた。

「ええ、何人か」と速水。

「何人か？」

ちょっと驚き聞き返す京子。

「ええ、あ、彼女はいないか」と上を見て、あごに手を添えて言う速水。

「ん？ どういうこと？」と前のめりになる京子。

「ずいぶんつっこんで聞いてきますね」笑う速水。

「だって、そんな謎の発言聞いたら、興味でるでしょ！」

言ってから、ワインを追加注文する京子。

「謎って、たいしたことないですよ、いわゆるセフレがいるだけで、いや、セフレと言うと表現が悪いが、デート相手が複数いるだけで……」

「ス、スケコマシじゃない！」

思わず声が大きくなる京子。

「しー！しー！」と慌てる速水。

「僕が誘ったわけじゃないですよ！」

「誘われて、僕が力になれることがあればって応えていったら……」

「なあにかっこいいこと言ってんのよ！」

「ハメたいだけじゃない！」

酔いも回って、口が悪くなる京子。

しかし、そんな情報を得ても、速水の印象は悪くならなかった。

むしろ、下手に飾らないで良い状態になって、気持ちは楽になっていた。

「まったく、若いっていいわね」

京子はワイングラス片手に、片ひじついて言った。

世間体や体面なんかを気にする自分がばかばかしくなっていた。

「40代の人もあるから、そんな若くもないかと思いますが」

速水もグラス片手に言う。

「40代？ セフレが？」京子は驚き、聞く。

「50手前だったと思うなあ。彼女は」

速水は筋肉質の腕を胸の前で組み、上を見て言う。

「え？ そんな上の人とつきあってるの？」

自分の半分くらいの年齢の男をセフレにする女性とは、どんな人なんだろう、と思った。

「つきあうというか、月に一回くらいエッチするだけです。結婚している人だし」

速水は手を横に振りつつ言う。

何を否定しているのか、京子はよくわからなかった。

ただ、速水がかなり年上の人妻とエッチしていることはわかった。

「不倫じゃない！」と京子。自分も何かを否定したいと思った。

何か、自分が損している感じがしていたのだ。

「まあ、そうなるのかもしれないけど、頼まれたので仕方なくってところもあるし」

「僕は悪くないと思ってますよ」

「むしろ、サービスを提供しているので、褒められたいくらかと……」

苦笑いしながら言う速水。

サービスか。

確かに、速水のような肉体美の男に抱かれるのは、男性がグラビアアイドルとエッチするようなものなのかもしれない、と京子は思った。

ふう、と京子は息を吐いて、背もたれにもたれかかった。

なんだか、急に疲れた感じがしてきていた。

自分には刺激が強い話だな、と思った。

「だから、杉原さんのことも抱かせてくださいよ」

速水が唐突に言った。

「は？」と京子。

ついで「ないない、無理無理」目を細め、笑顔で手を振り否定した。

「何故ですか？」

意外です、という顔で聞いてくる速水。

「だって、既婚だし」と答える京子だが、そういえば、既婚でもセフレを作る女性はあるんだったな、と思った。

「そうですね、なので、完璧に秘密でないとだめですね」と速水。

「ばれるものじゃない？」と京子。

「ばれてませんが」と速水。

うーん、と京子は腕を組みうなる。

「じゃあ、わかりましたよ。ばれたら、何もかも僕が悪いせいにすればいいじゃないですか」

「一夜限りのナンパ師じゃないし、身元バレバレの相手なのだから」

速水が肩をすくめて言う。

たしかに、職場がわかっていて、本名もわかっている。

だが、やはり、夫への不貞が心苦しい。

「そうか、だめですか。そうですよね」

速水は椅子に座り直し、京子から視線をそらして言った。

「この話は、なかったことに……」速水が京子の顔を見て言いかける。

「お試しってことは可能かしら？」と京子は言った。

自分でも何を言っているのかわからなかった。

自分以外の誰かが言ったような気がした。

だが、言ったのは紛れもない京子自身だった。

速水はきょとんとした顔をしている。

「あの、マッサージ的な。インストラクターだし」

慌ててつくろうようにして言う京子。

「中学生ですか？」と笑いながら言う速水。

「だって……」とふてくされる京子。

京子は思った。

この速水の誘いを断れば、また性的欲求不満の日々が続くだけである。

英輔が、性欲旺盛になるとも思えない。

近日中に離婚したり、英輔が亡くなるとも思えない。

ということは、自分は、ただひたすら欲求不満のまま年を取っていくだけである。

速水のような魅力的な肉体の男性に抱かれるチャンスなど、微塵もないだろう。

エッチな行為でなくても良い。

ただ、あの筋肉質でたくましい腕で抱かれてみたい、と思っていた。

それは、原始的な欲求で、京子自身では抑えつけることができないものだった。

「それとも、私みたいなおばさんじゃ、物足りないかしら？」

京子は聞いた。

いくら京子の中に燃え上がる欲望があっても、それを速水が受け入れなければ、何も始まらなかった。速水の望む行為と自分の望むものが一致しなければ、結果はよくないものになるだろう。

「物足りないなんて、当然、そんなことはありませんよ」

「言ったじゃないですか、魅力的だって」

「わかりました、では、どれだけ魅力的か、教えますよ」

速水は言った。

「期待外れかもしれないわよ」と京子。

「それを確かめましょう」と速水。

「絶対、他の人には知られないでよ！」

「知られたら、大変なことになるんだから！」

京子は真剣に確かめるように言った。

しかし、生来の生真面目な自分にちょっと不満も感じた。

世の中には、もっと軽くいろんなエッチを楽しんでいる人がいるのだろうか、とも思っていた。

「わかりましたよ。僕だって大変なことになるんだから」

たしかに、と京子はうなずいた。

「では、行きましょう」と立ち上がる速水。

「え？ 今から？」と京子。

「時間ないんですか？」と速水。

「時間は、そんなに遅くなければ大丈夫だけど……」

英輔が遅くなるというときは、だいたい真夜中を過ぎる。

お酒が大好きな彼は、友人と食事に行くと遅くまで飲むのが普通だった。

「あの、いろんな処理が……」

京子は、急に恥ずかしくなった。

「大丈夫ですよ。うちに色々あるから」

会計をすまそうとする速水が言う。

「うち？」

「速水君の家に行くの？」

ちょっと意外と思った京子。

「ええ、だってホテルに行くとお金がかかるし、うち、そんなに遠くないから。タクシーでワンメーターくらい」と速水。

「家にヨガマットとかあって、色々できますよ」と続ける。

（色々？ なんだろう？）

京子は、とたんに興味が湧いてきた。

久しく感じたことのないワクワクした感じがたまらなかった。

危険なことを自分はしようとしている、とは思っていた。

だが、すでに沸き上がった強い興味と性的欲求は、理性で抑えることの難しいものになっていた。

アルコールと非日常的な状況に体は火照り、性器に湿り気を感じていた。

もしも不倫がばれた時には、酔って理性を失っていた、とすれば良いかとも思っていた。

速水は、タクシーを止めた……

不倫人妻調教物語



杉原京子編(1)



解説の視点

作・画 窪リオン

だって……

だが、性的快楽を
得たいという
欲望は消えて
いなかった。

楽しんで
ください

速水の部屋は
小綺麗なマンション
だった。

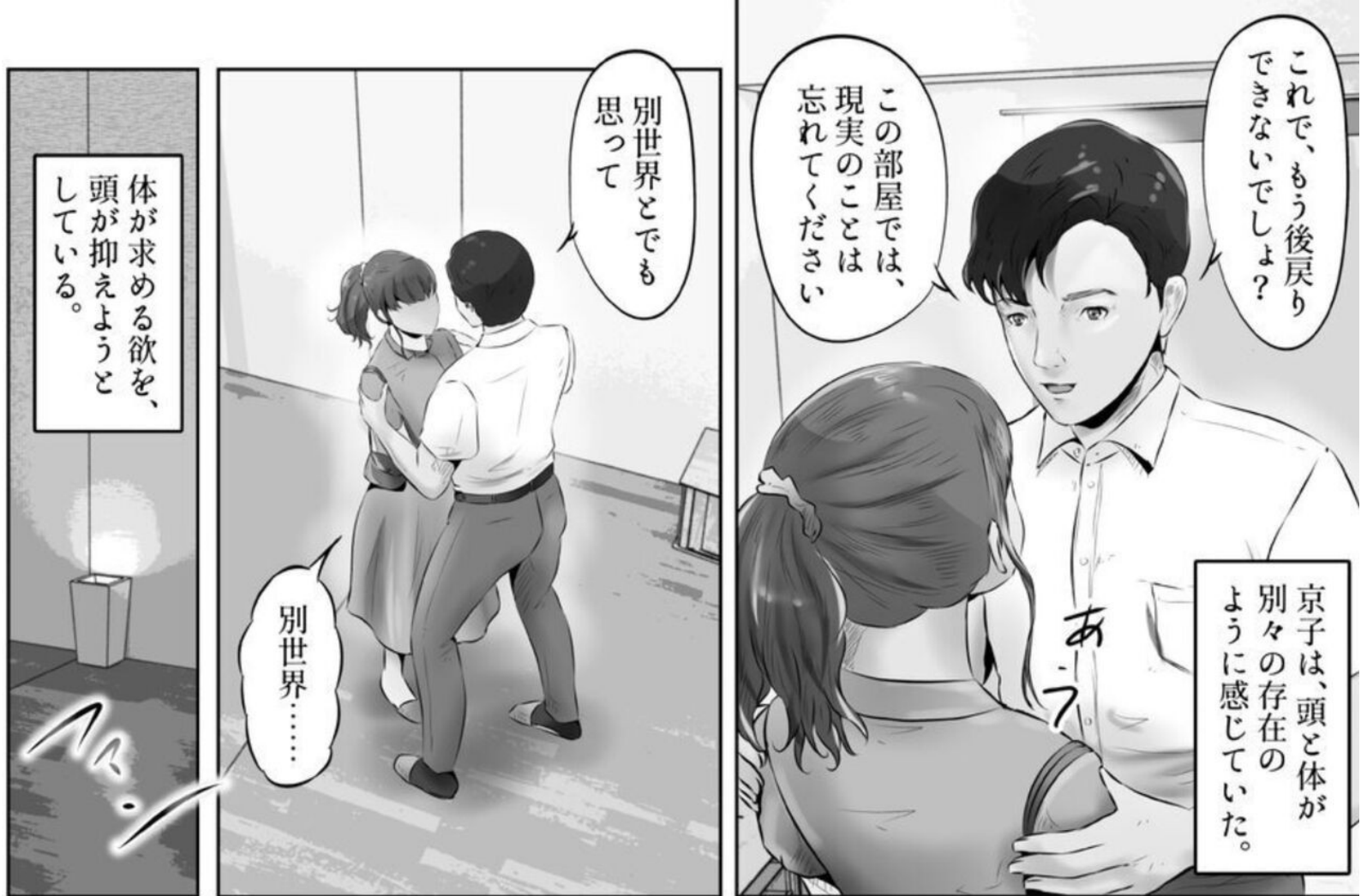
ふいにキスされ、
内股に力が入った。

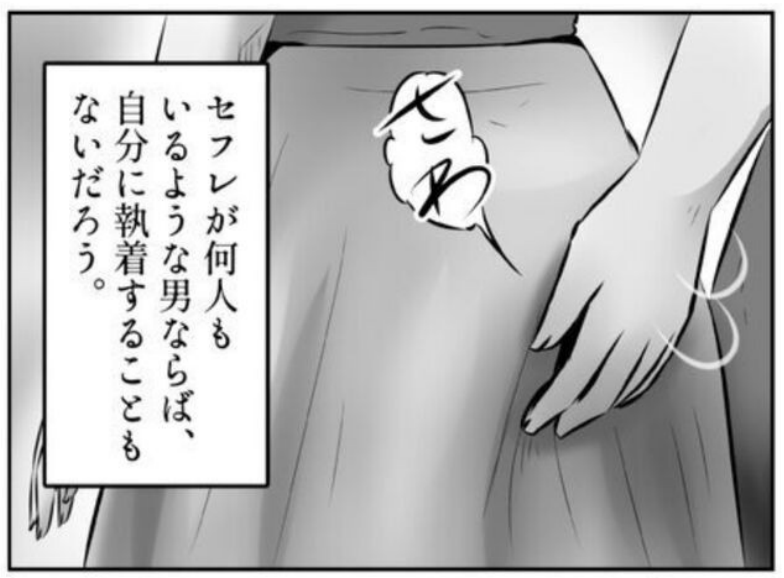
少し、愛液が
染み出た。

勢いで来て
しまったが、京子は
まだ逡巡していた。

本当に、良かった
のかしら……？

まだ、そんなこと
言っているん
ですか？









今度、
エロ下着姿、
見せてください

今度が
あるかなあ



言葉では控えめなことを
言っても、体はより強い
快楽刺激を求めていた。

ありますよ



うん
やっぱり、
すばらしい体
してますね

あ
あ
地味下着で
失敗よ……

下着姿を、夫以外の
男に見られる。

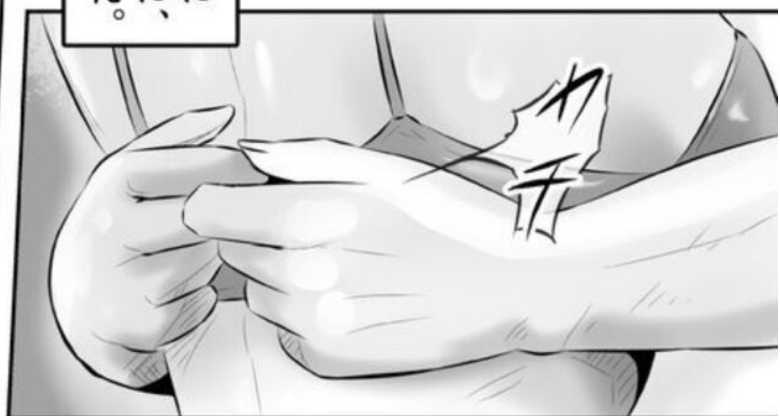
そんなことで、
こんなに興奮し、
性器が濡れるとは
京子は思わなかった。

速水の舌が京子の舌を絡め、ほぐすように撫で上げてくる。



口内が性器になったように、京子は感じた。

吸われると、自分でもわかるくらいに愛液が溢れる。



乳首はすでに勃起し、敏感になっていた。



ああ。

ああ。

だ、だめ、シャワー浴びてから！

いいですよ。僕も、脱がしてください

ぐっしより濡れたパンティを知られたくなかった。





速水は引き締まった体で、
力強く京子を抱いた。



後ろを
向いて

え……

速水は、むっちりとした
京子の内腿にペニスを
擦り付けた。

巨大なペニスが
京子の肉に挟まれ、
しごかれていた。

おチンチン、
舐めたい……

クリトリスが愛撫され、
心地よい刺激が走った。

まだ駄目です。
出てから







そそり立ち、硬直した
速水のペニスは、
たどえようもない
くらいに美味しかった。



京子は、速水に
言われたまま、
四つん這いになり、
ペニスにしゃぶりついた。



京子は、我を忘れて、
口いっぱい巨大大な
ペニスをくわえ込んだ。







初めて感じる
バラ鞭の刺激。



甘いペニスを味わう
途中で、その痛みは
隠し味のスパイスの
ように、快楽神経を
刺激した。



さぼらず
しゃぶれ！

パチパチと弾ける
ような、その痛みが
京子には心地よかった。

不倫人妻調教物語



杉原京子編(1)



京子の視点

でも、体は
興奮してる……。

だって……



部屋に来たら、
余計に不安が
広がる……。

グッ

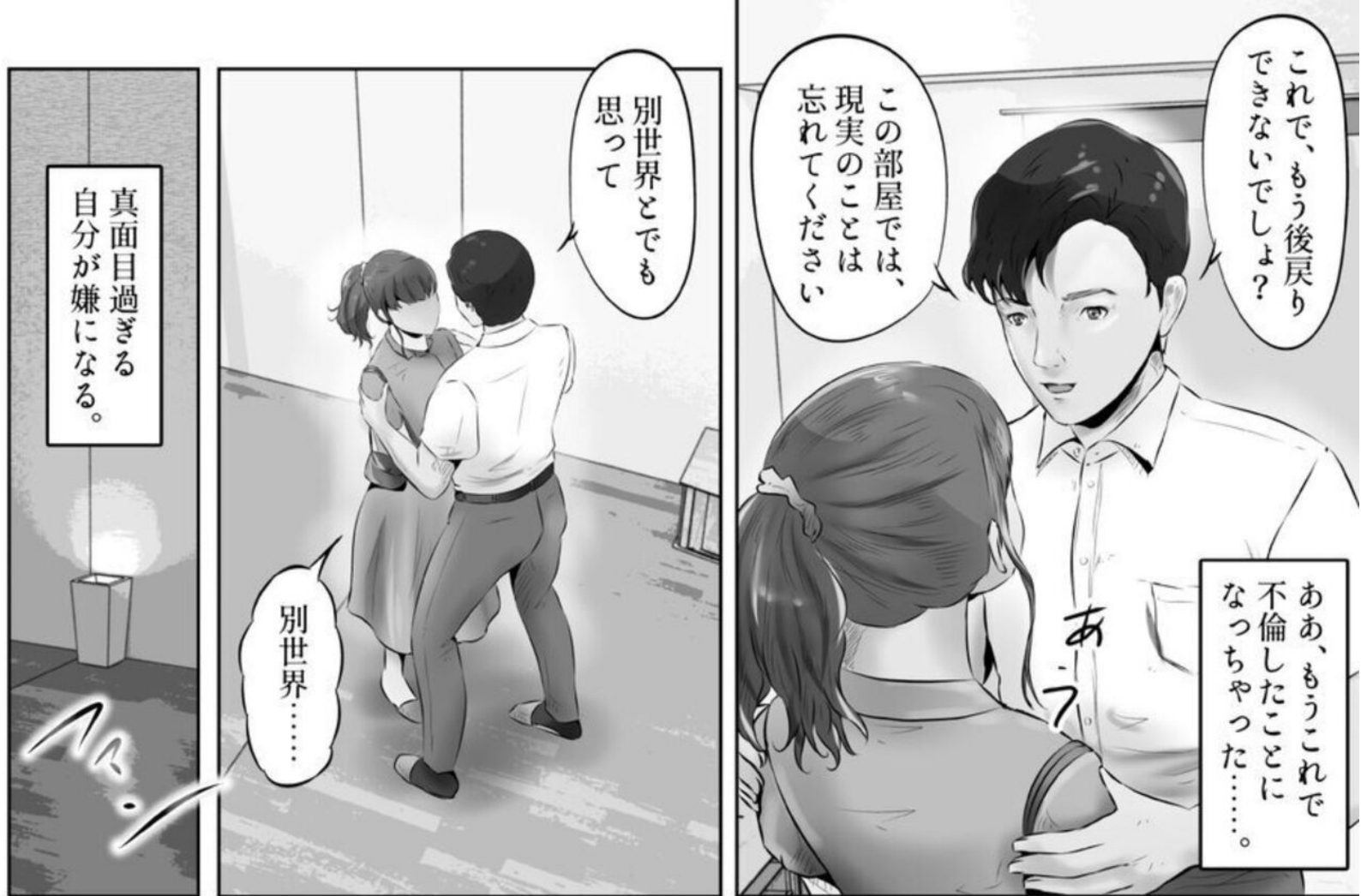
本当に、良かった
のかしら……？

まだ、そんなこと
言っているん
ですか？

うう

ふいにキスされ、
驚いた。
体温が一気に
上がった気がする。

めめめ









今度、
エロ下着姿、
見せてください

今度が
あるかなあ



どうせなら、たっぷり
楽しんでみたい……。

ありますよ

はは



うん
やっぱり、
すばらしい体
してますね

あゝ

地味下着で
失敗よ……

お世辞でも
嬉しく感じてしまう。

やっぱり、私、
飢えていたんだなあ……。

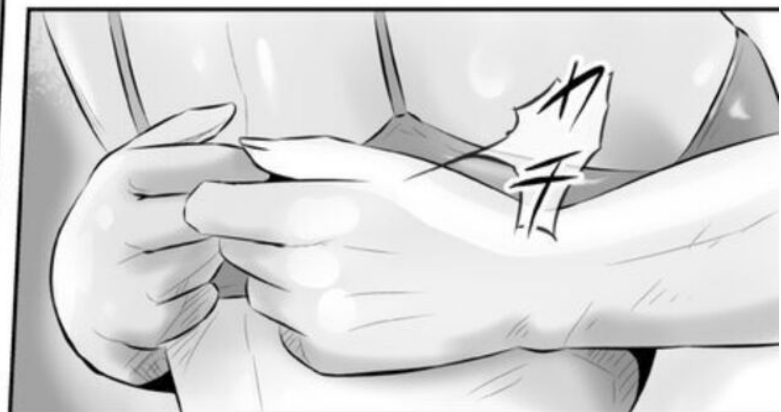
キスが
美味しいって、
久しぶりの感覚。



ああ、絶対
おまんこ濡れてる。



だ、だめ、シャワー
浴びてから！



乳房も乳首も
敏感になってる。



いいですよ。僕も、
脱がしてください

パンティが
濡れまくりなんて、
知られたくない。





抱かれて洗われるの
久しぶり。



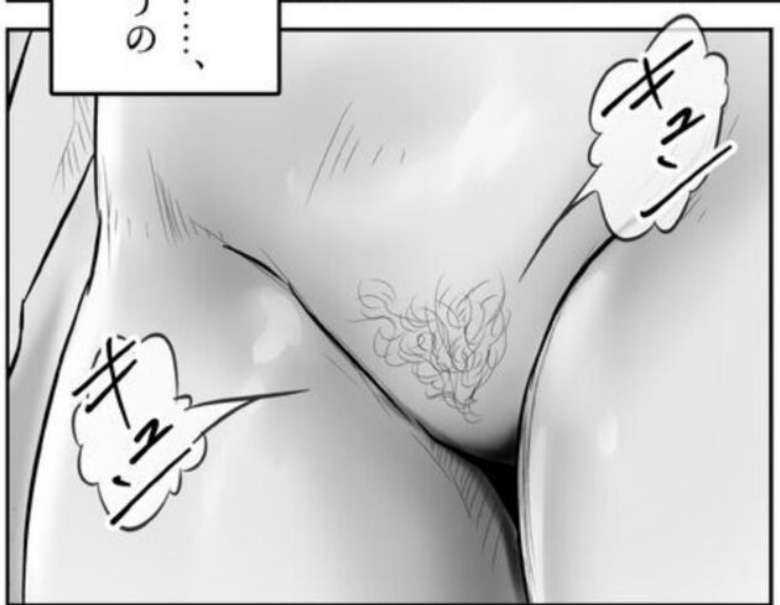


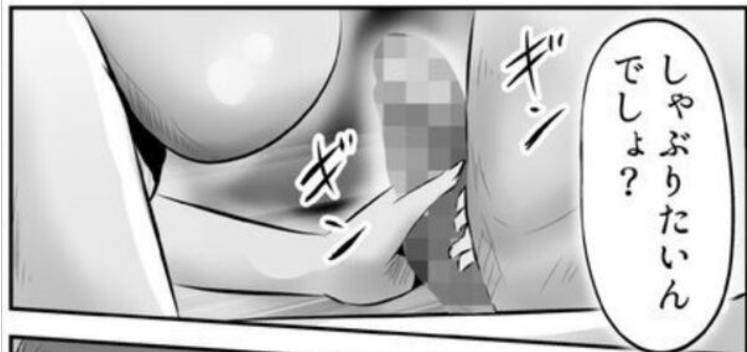
ああ、こんなこと
したことない！

股に挟んだだけでも、
挿入されてるみたいで、
感じちゃう！









犬みたいになって、しゃぶりまくりたい……。









おマンコに強引につつこんで、ぐりぐりかき回して欲しい！



お、おチンチン欲しいです……

ああ、おチンチン、おマンコに欲しい！



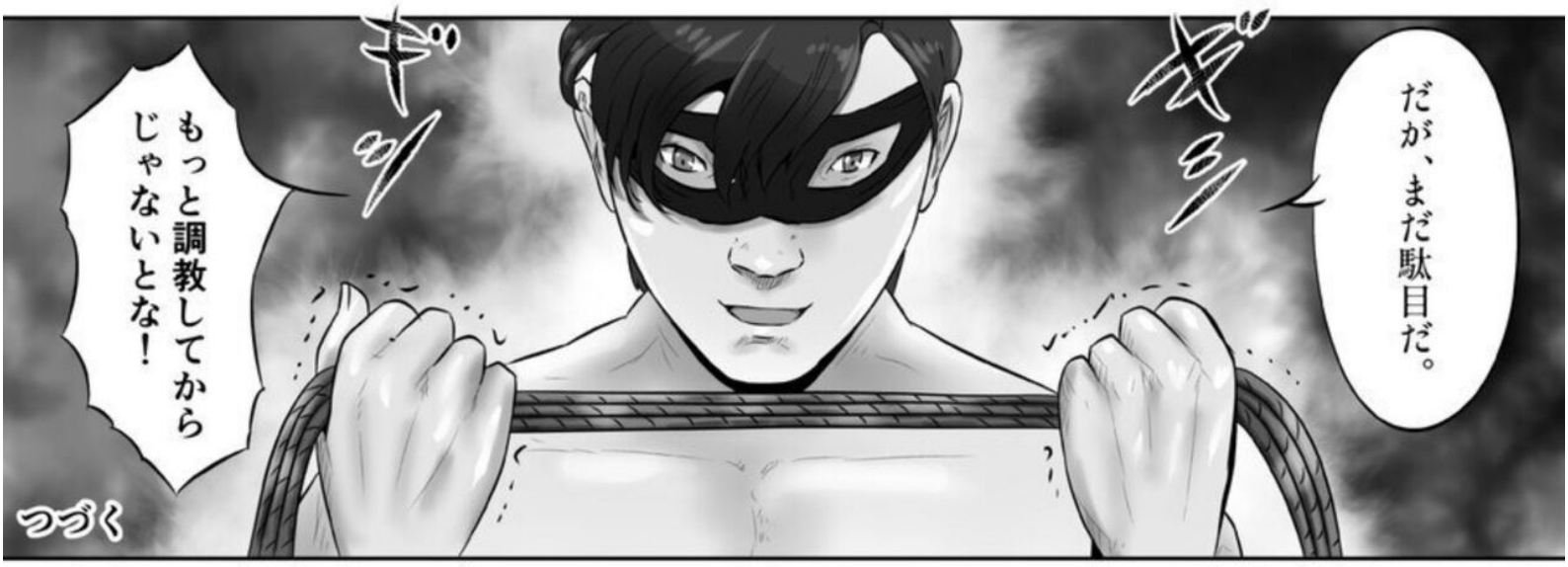
ずいぶんスケベな顔になってるな



どんどんマン汁が溢れてくるぞ！

ああ、おマンコ気持ちいい！
気持ちよすぎる！！

おチンチン、おマンコに入れて欲しい！



だが、まだ駄目だ。

もっと調教してからじゃないとな！

つづく